

自然遊学館 だより

No.102

2022 SPRING

2022. 5. 30 発行 貝塚市立自然遊学館

今号の一葉 「アカイボトビムシの一種」

朽ち木や落ち葉の下などでみられます。
朽ち木や落ち葉の色から想像できないような
こんな派手な色の生きものも見られます。

今号の窓絵 「ヤブキリの幼虫」

キリギリスに似ていますが、より樹上性が強く、
脱皮をすることで、肉食性も増していきます。
春に卵が孵化して、2ヶ月ほどで成虫になりま
す。キリギリスの方が神経質のように思います。

※毎号左図の円の中のイラストが変更していきます



目 次

* ネイチャーレポート

- 2022 年新春打ち上げ貝採集
..... 児嶋恭平 ... 1
- 海辺で拾う陸産貝
..... 藤本龍之介 ... 2
- 冬の風物詩探求
..... 鞍井依子 ... 3
- スズメバチと毒ヘビによる被害
..... 岩崎 拓 ... 4

* 行事レポート

- ミニ企画展「虎展」報告
..... 天満和久 ... 6
- 打ち上げ貝拾い
..... 山田浩二 ... 7
- ノリスき体験～西鳥取漁港～
..... 山田浩二 ... 8
- せんごくの杜&近木川河口パードウォッチング
..... 和田太一 ... 9
- 企画展「自然遊学館の2021年の出来事展」報告
..... 天満和久 ... 10

* 泉州生きもの情報

- 樫井川河口でマキトラノオガニを採集
..... 山田浩二 ... 11
- シロトゲエダシャクのメスを発見！
..... 鞍井希風 ... 11

* 調査速報

- 貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 23
..... 鈴子勝也 ... 12

* 館長コーナー

- 皆様とともに
..... 秋山芳樹 ... 12

* 皆様からの情報コーナー

- 寄贈標本 13
- 寄贈写真 14

* スタッフ日誌

- 14



ネイチャーレポート

2022 年新春打ち上げ貝採集

年末から季節風が強かったのも、昨年の1月に行った阪南市男里川河口左岸の海岸へ、今年の1月も打ち上げ貝採集に行きました。生貝は見つかりませんでしたが、二枚貝の残肉死殻は、トリガイ (図 1)、ヒメシラトリ、シラトリモドキ (図 2、大阪府レッドリスト 2014 準絶滅危惧)、ホトトギスガイ、サクラガイ (図 2、環境省レッドデータ準絶滅危惧、大阪府 準絶滅危惧)、ユウシオガイ (図 2、環境省 準絶滅危惧、大阪府 絶滅危惧Ⅱ類)、オニアサリ (図 2、大阪府 準絶滅危惧) などが見つかりました。巻貝の残肉死殻は、マツバガイ、ツメタガイ、アダムスタマガイ (図 3、環境省 準絶滅危惧、大阪府 準絶滅危惧)、メダカラ (図 4)、ハツユキダカラ幼貝 (図 5) などが見つかりました (表 1)。

今年1月は計3回採集に行きましたが、昨年1月に計4回行った採集結果と比べると、残念ながら、ウスハマグリやイセシラガイを見つけることができませんでした。僕が集めているタカラガイでは、メダカラ、ハツユキダカラ幼貝の残肉死殻のほかに比較的新鮮なメダカラとハツユキダカラの死殻が見つかりました。やや古いキイロダカラの亜成貝、古いハナマルユキや、コモンダカラの死殻も見つけました。

なお、困ったことに2019年3月に見つけた投棄貝(階段左側のハマゴウ群生地側の海側すぐのところでおお阪湾内では通常見られないタカラガイの仲間やイモガイの仲間など80種1050個、約7kgが投棄されていた。)の一部と思われるホシキヌタとクチュムラサキダカラを干潟と海岸を分ける突堤の左側(海岸側)の根元で見つけました。これらは今回採集した打ち上げ貝のリストには含めていません。



図 1. トリガイ残肉死殻



図 2. 左からシラトリモドキ、オニアサリ、サクラガイ、ユウシオガイの残肉死殻



図 3. アダムスタマガイ残肉死殻



図 4. メダカラ残肉死殻



図 5. ハツユキダカラ幼貝残肉死殻



表1. 男里川河口で採集した打ち上げ貝

グループ	和名	2022/1/1	2022/1/10	2022/1/15	
腹足綱	ヨメガカサガイ科 マツバガイ	○			
	ニシキウズ科 エビスガイ		●		
	アマオブネガイ科 イシマキガイ	●			
	タカラガイ科	メダカラ	○●	●	●
		ハツユキダカラ	○●	●	●
		ハナマルユキ	●		
		コモンダカラ		●	
		キイロダカラ	●		
	ザクロガイ科 ザクロガイ		●		
	タマガイ科	ツメタガイ	○●	●	○●
		オオネズミガイ	●	●	
		アダムズタマガイ	○●	○●	●
	フジツガイ科 ウネボラ		●		
	イトカケガイ科 ナガヒメネジガイ		●	●	
	アツキガイ科 カゴメガイ		●		
	フトコロガイ科 ムギガイ	●	●	●	
	ムシロガイ科	アラレガイ		●	
		ヨフバイ		●	
		キヌボラ			●
	マクラガイ科 マクラガイ		●		
コロモガイ科 オリイレボラ		○			
トウガタガイ科 クチキレガイ			●		
二枚貝綱	フネガイ科 カリガネガイ	●	○	●	
	クイチガイサルボウ			○	
	イガイ科	ムラサキイガイ			●
		タマエガイ		●	
		ホトギスガイ	○●	●	●
	イタヤガイ科 アズニシキ	●		●	
	ナミマガシワ科 ナミマガシワ			○	
	ザルガイ科 トリガイ	○	●		
	マルスダレガイ科	ヒメカノコアサリ			○
		オニアサリ	○	●	
アサリ			○	○	
ヒメアサリ			○		
イヨスダレ		●	●	○●	
	ウチムラサキ		●		
オキナガイ科 オキナガイ		○			
バカガイ科	バカガイ		●		
	ミルクイ		●		
チドリマスオ科 クチバガイ	●	●	●		
ニッコウガイ科	サクラガイ	○●	○●	○●	
	ヒメシラトリガイ	○●	○●	●	
	シラトリモドキ	○	●		
	ユウシオガイ	○●	○●	○●	
	シオサザナミガイ科 ムラサキガイ		○		
マテガイ科	マテガイ		●		
	エゾマテガイ	●		●	
キヌマトイガイ科	キヌマトイガイ		●		
	ナミガイ		●		

○・・・生息確認種(残肉死殻)
●・・・死殻

参考資料

奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 [第二版], 1375pp. 東海大学出版部, 神奈川.
日本のレッドデータ検索システム jpnrdb.com.

(泉佐野市立第三中学校 2年 児嶋 恭平)

海辺で拾う陸産貝

二色の浜海岸を歩いていると、様々な色や形をした貝殻を拾うことができます。そのほとんどは海の貝ですが、中には淡水や汽水の貝、陸産の貝(カタツムリ)が混じっていることもあります。淡水貝など、もともと水の中に住んでいる貝ならまだしも、陸に住んでいる貝がどうして海の貝と一緒に漂着しているのか、不思議に思われるかもしれません。おそらく、陸産貝の多くは海の貝に比べ殻が薄くて軽いので、陸上で死んだ後に雨などで流され、海に注ぐ川まで運ばれ易いでしょう。

しかし、殻が薄く軽いということは、川や海を漂っている間に壊れやすいということでもあります。海辺で見つかる陸産貝は、殻が壊れたり、殻皮がはがれ真っ白になっていたり、元の姿をすぐには想像し難いものも少なくはありません。今年1月に、二色の浜へ注ぐ近木川河口で行われた、打ち上げ貝拾いの行事にて採集された陸産貝達も、満身創痍といった姿です(図1)。



図1. 左上:クチベニマイマイ、右上:オオケマイマイ、左下:ウスカワマイマイ、右下:ニッポンマイマイ

皆真っ白で、欠けもあり、オオケマイマイは殻の周縁に生える特徴的な毛も全て無くな

ってしまっています。しかし、ウスカワマイマイなどは、生きていてもつまんで少し力を入れれば簡単に砕けてしまいそうな殻をしているにもかかわらず、形を残したまま漂着しています。これを見ると、あのよう薄い殻でも、しっかり体を守る役割を果たしているのだと、力強さを感じます。

ところで、陸産貝の中には、水中に生息している巻き貝と同じように、殻口に蓋を持つグループがあります。これらは、一般的にイメージされるカタツムリと違い、目が触角の付け根にあたり、肺を持っていなかったりと、かつてカタツムリの祖先達が水中で暮らしていた頃の特徴を、色濃く残しているものたちです。そのような蓋を持つ陸産貝の仲間、二色の浜でよく拾うことができるものに、アズキガイがあります(図2)。ただし、蓋は軟体足部に筋肉で付いているので、漂着時には失われていることが普通です。



図2. アズキガイ(近木川河口漂着個体・蓋は消失)

この小豆のような姿をした小さな貝は、積もった落ち葉や倒木の下などで暮らしており、貝塚市では、和泉葛城山のブナ林を中心に生息しています(松村、2003)。二色の浜の近木川河口でアズキガイが拾えるということは、近木川の上流域には、アズキガイが生息でき

る良好な環境が存在していると言えます。

このように、海辺に漂着する陸産貝の種類や数の変化は、その近くに流入する川が、流れてくる間に通ってきた周囲の環境の状態を教えてくれることがあります。陸産貝は、素早く走ることも、空を飛ぶことも、川を泳いで渡ることもできません。そのため行動範囲は狭く、ピンポイントな場所に依存して生活しており、環境が変わっても他の場所へ逃れることもできず、あつという間に姿を消してしまうこともあります。皆様も海辺に漂着した陸産貝の殻を見つけたら、海へ流れ込む川や、その川上の環境に想いをめぐらせてみてください。

引用文献・参考文献

- 松村 勲(2003) 貝塚市の陸産貝類. 貝塚の自然— 貝塚市立自然遊学館創立10周年記念号—: 158-174.
 児嶋 格(2014) かたつむり展. 貝塚の自然 16: 79-94.
 武田晋一・西 浩孝(2015) カタツムリ ハンドブック. 文一総合出版.

(藤本 龍之介)

冬の風物詩探求

虫がどんどん姿を消し、寒さと物悲しさを感じ始めた冬の初め、息子に提案されたことがあります。それがフユジャク探しでした。住居が山手であり近くに木々が多い公園があるので、「冬になったら夜の公園でフユジャクを探したい」と。なるほど、「冬には冬の虫がいるのね。探そう、フユジャク!」どんな虫かも知らずに、そう答えて話は終わっていました。

しかし、出会いは思いもかけない所で訪れました。遊学館に行ったある日曜日、職員の方と一緒に見学者の方々を自然生態園へ案内している時、「何か説明できる昆虫を探してみて」と言われ、息子と一緒に探すことになりました。寒さは厳しくとも、良く晴れていて太陽に当たれば暖かい日よりでした。自然生態園の石垣の前で「フユシヤク！」と息子が言ったのです。「入れ物、早く！」あわてて息子の視線の先を見ると、石垣の太陽が当たった場所に白くて小さな薄っぺらな蛾の姿がありました。ああ、採りたいと話していたフユシヤクか。逃がすまいとフユシヤクから視線をずらさず、「手で採集できそうな容器を早くもってきて」と合図する息子に、私も焦って遊学館事務所へ猛ダッシュしました。

調べていただくと、シロフフユエダシヤク（シヤクガ科エダシヤク亜科）の雄でした。遊学館には記録のないものでした。こんなところで採れるのか、とみんなで笑いあいましたが、本当にそうなのです。少し視線をずらせばキラキラ光る海水面が見える、ここは埋立地、人工の土地なのです。

この機会にフユシヤクについて教えていただくことにしました。それは非常に興味深い生態でした。まず雌は飛べないのです。マニアックな図鑑を見せてもらおうと、進化の過程で飛ぶことを捨て、翅は退化して痕跡程度しかありません。ぽってりした胴にかつて翅であったであろう小さなふさふさと、細長い脚。奇妙でしかありません。寒い冬の夜に無理してでも探したくなる訳です。雄は夜な夜な飛び回り、じっと待つメスを探すのでしょうか。だとしたら、自然生態園でいた雄は・・・？

結局、その後、何度も雌のフユシヤク探しを自然生態園で行いましたが、見つけることはできませんでした。あの雄が雌のフェロモ

ンに誘われて生態園にいたのか、それともただ何かにくっついてきて迷い込んでしまったのかわかりません。

しかし、人間が造成した場所でも、隙あらば生息範囲を広げようとやってくる、たくましく生きようとする生きもの姿があることに違いはありません。

フユシヤクの不思議な進化に思いを馳せながら、冬にこのフユシヤクの次世代に出会えることを夢みてみようと思います。



図 1. 採集したシロフフユエダシヤク
(2022年2月27日採集)

参考資料

- 中島秀雄（1993）冬に出現する尺蛾—新・フユシヤク類の採集—。やどりが 152 号, 2-28.
中島秀雄・小林秀紀（2017）月刊むし昆虫図説シリーズ 11 虫日本の冬尺蛾. 152pp. むし社, 東京.

（自然遊学館わくわくクラブ 鞍井依子）

スズメバチと毒ヘビによる被害

来館者の方から受けた今年最初の質問は「(日本では) スズメバチで年間、何人が死ぬの?」というものでした。

例えば、1998年発行の『日本動物大百科 10』(平凡社)には、年間約 40 人の犠牲者という表記があり、2019年発行の西海太介氏の著

書には毎年 20 人ほどと書かれています。質問を受けた時は、自分が何となしに覚えていた 30 人程度と答えましたが、その数はやや古いデータだったようです。

厚生労働省 HP から閲覧できる人口動態統計のデータを調べると、「スズメバチ・ジガバチ・ミツバチ」による被害が、2001 年から 2020 年の 20 年間の平均が 18.6 人で(表 1)、この 20 年間に限っても、先に紹介した 2 つの文献が示す通り、若干減少傾向にあることも分かりました。項目名にはジガバチとミツバチが含まれていますが、実際にはアシナガバチ亜科を含むスズメバチ科が大半を占めると思います。それで節足動物全体による被害の約 95%を占めていました。

年平均 5.2 人という「毒ヘビ」という項目では、マムシ、ヤマカガシ、ハブが含まれますが、ヤマカガシによる死亡例は少なく、ハブは血清が普及して、近年はほとんど亡くなる方がいないそうです。それよりも多いのが年平均 9.9 人の「哺乳類による咬傷又は打撲」という項目で、すぐ頭に浮かんだのがクマとイノシシですが、自分が思っていたよりも他の哺乳類による死亡も多いようです。

その他、「エキノコックス症」は条虫による感染症で、主に北海道のキタキツネが感染源になり、「ネコひっかき病」はノミが主にネコ間に伝染させる細菌感染症、「ダニ媒介性ウイルス脳炎」はマダニによるウイルス感染症です。

自然遊学館の行事では幸いなことにスズメバチ、ヘビ、イノシシ、ダニによる被害はありませんでした。この他、二色の浜や近木川河口での行事も催され、海生生物による被害も心配されます。しかし、表 1 に 0.2 人とあるように、海生生物との接触による死亡は少数です。また表 1 には掲載しませんでした。アニサキス症という線虫による被害も死亡者数ゼロでした。

表 1. 死因別の年平均死亡者数

主に厚生労働省の人口動態統計による
2001年から2020年までの平均値

死因区分	年平均人数
節足動物との接触	19.7
スズメバチ等（ハチ類）との接触	18.6
哺乳類による咬傷又は打撲	9.9
ツキノワグマ	1.9
ヒグマ	1.2
イノシシ	0.4
毒ヘビとの接触	5.2
エキノコックス症	2.6
フグ（食中毒）	1.4
キノコ（食中毒）	0.6
ネコひっかき病	0.3
植物のとげ及び鋭い葉との接触	0.2
海生生物との接触	0.2
ダニ媒介性ウイルス脳炎	0.1

- *1 スズメバチ等、ツキノワグマ、ヒグマ、イノシシは、その上段の区分の内数
- *2 スズメバチ等は、ジガバチ、ミツバチを含む
- *3 哺乳類は、ネズミ(0.2人)と犬(2.3人)を除く
- *4 ツキノワグマとヒグマは、2008年からの13年間、イノシシは2016年からの5年間の値（年度の値）
- *5 フグとキノコに関しては、食中毒統計の値

人口動態統計は各年の死因データが項目別にまとめられていて、別に記号表（コード表）を参照しながら閲覧していくので、やや手間がかかるかもしれませんが。その他、クマとイノシシによる被害は環境省 HP の野生鳥獣に係る各種情報というページを参照し、食中毒に関しては、厚生労働省 HP の食中毒統計のページを参照しました。

引用文献

西海太介 (2019) 『身近にあふれる「危険な生物」が 3 時間でわかる本』、206pp. , 明日香出版社。
松浦 誠 (1998) スズメバチ亜科. 日高敏隆 (監)・

石井実ほか(編)『日本動物大百科 10・昆虫Ⅲ』、
平凡社、pp. 38-40.

参照サイト

人口動態統計・死因 (厚生労働省)

[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/file?
page=1&toukei=00450011&tstat=000001028897](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/file?page=1&toukei=00450011&tstat=000001028897)

食中毒統計資料 (厚生労働省)

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/
bunya/kenkou_iryuu/shokuhin/syokuchu/04.htm](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/shokuhin/syokuchu/04.htm)
1

野生鳥獣の保護及び管理 (環境省)

[https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/
docs4/index.html](https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs4/index.html)

(自然遊学館わくわくクラブ 岩崎 拓)



行事レポート

ミニ企画展「虎展」報告

2022 年は寅年ということで、開催期間を 1 月 5 日 (水) ~1 月 31 日 (月) までとして、ミニ企画展「虎展」を開催しました。

展示は、遊学館に所蔵されている昆虫標本の中から、種名に「トラ」が入るものを 15 点、また「トラ」の文字は入りませんが、トラのようなしましま模様が入る昆虫を 10 点展示しました。

そのほかにも、トラといえば黄色と黒色なので、同様のスズメバチの仲間 7 種 33 点 (オオスズメバチ 6、キイロスズメバチ 4、コガタスズメバチ 3、ヒメスズメバチ 1、セグロアシナガバチ 11、フタモンアシナガバチ 3、ホソアシナガバチ 5) で「寅」の文字を表現しました (図 1)。

「小正月」にあたる 1 月 15 日からは「寅」

の文字を描いた展示をハンミョウの仲間の展示に変更しました (図 2)。ハンミョウの仲間は、英語では「タイガービートル」とよばれ、その美しさとは裏腹に大きな鋭い牙を利用して、獲物を捕らえます。動きもとても俊敏です。寅年の今年のうち、いつかこのハンミョウも生体展示ができればと考えています。

今回の展示に関しては、企画から展示までを鞍井希凧さんと依子さんに協力していただきながら行いました。



図 1. 「虎展」のようす



図 2. ハンミョウの仲間の展示

(天満 和久)

打ち上げ貝拾い

日時：2022年1月22日(土)13:00~15:30

場所：近木川河口右岸前浜、自然遊学館

参加者：30人（うちスタッフ10人）

冬の晴天に恵まれた中、浜辺に打ち上がる貝殻などの漂着物を拾い集める自然観察会を行いました。浜には流木やプラスチックごみなどが帯のように転がっている“打ち上げ^{たい}帯”があり、そこをじっくり探せばいろいろな貝殻を見つけることができました（図1）。

1時間ほど拾い集めた貝殻は、館に持ち帰り、講師の児嶋 格さん、大古場 正さんに貝殻1つ1つの種名を教えてもらいました。海産の貝ではイボニシやムギガイなど巻貝類が21種、ホトトギスガイやナミマガシワなど二枚貝類が23種見つかリ、また川から流れてきたカタツムリ類やタニシ類などの陸産や淡水産のものも見られました（表1）。

次に各自が拾った貝殻のなかからお気に入りのものを選び、紙皿に貼り付けていく作業を行いました。貝殻それぞれの下には種名の書いたラベルを付け、貝殻標本皿の壁飾りができあがりしました（図2、3）。



図1. 浜辺で打ち上げ貝を拾う

表1. 観察会で確認した打ち上げのリスト

		2022/1/22	
	グループ	和名	30人
腹足綱	ユキノカサガイ科	カスリアオガイ	r
		ニシキウズ科	コシダカガンガラ
		アシヤガイ	rr
		インダタミ	r
	アマオブネガイ科	イシマキガイ	c
	ウミナ科	ウミナ	rr
	カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	c
	ムカデガイ科	オオヘビガイ	r
	タマガイ科	ツメタガイ	c
		ハナツメタ	rr
		オオネズミガイ	rr
	アツキガイ科	レイシガイ	rr
		イボニシ	c
		アカニシ	c
ヒメヨウラク		r	
フトコロガイ科	ムギガイ	cc	
ムシロガイ科	アラムシロ	c	
	ヨフバイ	r	
トウガタガイ科	クチキレガイ	rr	
ブドウガイ科	ブドウガイ	rr	
カラマツガイ科	カラマツガイ	r	
二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ	c
		サルボウガイ	c
	イガイ科	ムラサキイガイ	r
		ホトトギスガイ	cc
	イタヤガイ科	キンチャクガイ	rr
	ナミマガシワ科	ナミマガシワ	cc
	イタボガキ科	マガキ	cc
	キクザルガイ科	キクザル	rr
	バカガイ科	バカガイ	r
		ミルクイ	rr
	チドリマスオ科	クチバガイ	c
	ニッコウガイ科	サクラガイ	c
		ヒメシラトリガイ	c
		ユウシオガイ	rr
シオサザナミガイ科	イソシジミ	r	
マテガイ科	マテガイ	r	
シジミ科	ヤマトシジミ	r	
イワホリガイ科	ウスカラシオツガイ	r	
マルスダレガイ科	カガミガイ	r	
	アサリ	cc	
	イヨスダレ	r	
	ウチムラサキ	rr	
オキナガイ科	ソトオリガイ	r	
淡水産	タニシ科	ヒメタニシ	rr
	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	c
陸産	アズキガイ科	アズキガイ	r
	オカモノアラガイ科	ナガオカモノアラガイ	rr
	キセルガイ科	ナミギセル	rr
	オナジマイマイ科	ウスカワマイマイ	r
		オオケマイマイ	c
		クチベニマイマイ	r
	ナンバンマイマイ科	ニッポンマイマイ	rr
頭足綱	コウイカ科	コウイカ属の一種	c
計			54

凡例：数量……cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数



図 2. 拾った貝で壁飾りの標本皿を作ったよ I



図 3. 拾った貝で壁飾りの標本皿を作ったよ II

(山田 浩二)

ノリスき体験～西鳥取漁港～

日時：2022年2月6日(土)10:00～12:00

場所：阪南市西鳥取漁港（名倉水産）

参加者：25人（うちスタッフ8人）

昨年は新型コロナ感染の拡大のため、中止となりましたが、今年は感染防止対策を取った上で参加人数を絞り実施しました。

貝塚市では現在、ノリの養殖をしているところはありませんが、1961年に貝塚市脇浜漁協で大阪府では初となるノリ養殖事業を始めました。1970年頃には岬町にかけての泉南各地で約70軒の養殖業者がいる最盛期でした。しかし、脇浜漁協は臨海部の埋め立て計画により1973年解散となり、また、ノリの価格の

下落などで多くの業者が廃業し、今では阪南市におずか3軒を残すだけとなっています。

そのうちの一軒である名倉水産にお世話になり、ノリの養殖方法についてお話を聞き、さっそくノリスき体験を参加者に体験してもらいました。ミキサーで砕いてドロドロになった生ノリを型に流し込み、上から押さえて板状にし、すだれに立てかけて天日に干していきました（図1、2）。

板ノリが乾燥するまでの数日間は、名倉さんの倉庫に置かせて頂き、その後、自然遊学館に届けられたノリは参加者の手に渡されました。



図 1. ノリスきの様子



図 2. 板ノリの天日干し

参考文献

『貝塚市の70年』編纂委員会（編）（2013）貝塚市の70年，290pp.，大阪府貝塚市。

(山田 浩二)

せんごくの杜&近木川河口 バードウォッチング

日付：2022年2月19日（土）

場所（時間）：せんごくの杜（10：00～12：00）
近木川河口（13：30～15：00）

参加者：26人（うちスタッフ7人）

午前中は貝塚市の市街地に近いせんごくの杜で里山の鳥を中心に観察しました。

集合場所で挨拶をした後、観察の前にまず双眼鏡の使い方を練習しました（図1）。ちょうど近くの上空を猛禽類のミサゴが旋回しており、双眼鏡を使って体の下面の白さやホバリングをする様子がじっくり観察できました。

せんごくの杜沿いに新たに整備された道路沿いを歩いていくと途中でカラスが騒ぐ声が聞こえ、森の中からオオタカがカラスに追われて飛び出してきました。1週間前に下見に来た際にも同じ場所でオオタカを確認していて、どうやらせんごくの杜に棲みついているようです。

カンコ池ではカイツブリやバン、オオバンなどの水鳥が見られ、突然「ツィー！」という鋭い鳴き声が聞こえたかと思うと、水面を青白い光が横切りました。水辺の宝石カワセミが対岸の木にとまり、背中綺麗なコバルトブルーを望遠鏡で見ることができました。

森へ入って、枝の間をせわしなく移動するエナガの群れや、木のとっぺんにとまって囀るシジュウカラの姿をじっくりと見ることができました。養護学校跡の道でメタセコイアの木にとまる小鳥の群れを見つけ、望遠鏡で確認するとイカルの30羽ほどの群れでした。「キコーキコーキー」と良く響く独特の鳴き声も聞こえてきました。

森の中の道を歩いていくと、前方にトコト

コと歩くタヌキの姿を見つけました。こちらが集団で見えても逃げることなく、あまり人を恐れていないようで参加の皆様はじっくりと観察していました。

森の道を抜けるとポツポツと雨が降り出し、足早に歩きながら農耕地にいたケリやタヒバリなどを観察しました。午前中のせんごくの杜では鳴き声のみの確認も含め31種の鳥が観察できました。



図1. せんごくの杜でのバードウォッチング

午後からは近木川河口で水辺の鳥を中心に観察しました。小雨が降る中でしたが、自然遊学館を出発して近木川河口に出ると、河口の砂嘴にはたくさんのカモやカワウ、打ちあがったボラを食べているセグロカモメの姿がありました。雨に濡れないよう高速道路の下へ移動し、双眼鏡・望遠鏡でカモを中心にじっくりと種類や行動を観察しました。カモの仲間はたくさん種類がありますが、オスメスで見た目が異なる種が多く、まずは特徴がわかりやすいオスを探してみることがポイントです。河口ではカルガモ、マガモ、ヒドリガモ、オカヨシガモ、ホシハジロ、ウミアイサなどが見られました。カモの観察をしているとその周りで波打ち際をチョロチョロと走り回るシロチドリとハマシギの姿も見つかり、50羽ほどの群れがいるようでした。

河口から少し歩いて汽水ワンド（干潟造成

地)へ行くと河口ではあまり見られなかったコガモやオナガガモがいて、マガモとカルガモの雑種?と思われるカモも見つかりました。汽水ワンドのブロック護岸にカワセミがとまっているのが見つかり、餌を狙って何度も水面へダイブする様子が観察できました。

雨が止まないのので、また河口の高速道路の下へ移動し、河口部で見られる野鳥の写真を見せながら水辺の鳥たちの特徴や生態について解説して終了しました。午後の近木川河口では、雨のため例年よりも短いコースになりましたが、31種の鳥が観察できました。午前途中からは雨が降る中での観察となりましたが、鳥たちは雨でも関係なく活動していました。雨降りの時は人の姿が少なく鳥たちも警戒心も薄くなっていたりします。実は雨降りの方が鳥たちの行動をじっくりと観察できるかもしれません。

(NPO 法人南港ウェットランドグループ 和田太一)

企画展「自然遊学館の2021年の出来事展」報告

恒例の1年間の出来事を振り返る特別展は、今回で11回目となります。展示方法はあまり変わらないのですが、実は今回は自然遊学館のスタッフそれぞれが1年間を振り返って、1枚ずつパネルを作成することとしました。

すごく印象に残ったこと、来館者の方々への感謝、ぜひとも伝えたいことなど、さまざまな想いで作成を始めました。

市民の方々から寄贈していただいたものや展示を作成していただいたものなども組み合わせながら、分野にあまりかたよりのないようにしながらの試みでした。



今回の展示のようす

多目的室はこれまでも特別展示のほかにも行事や学習会など、名称の通りさまざまな使用がありました。

そのため、これまでは常時観覧していただくことはなかったのかもしれませんが、しかし、少しでも市民の方々との関りを表現できる空間として、部分的ではありますが、これからはご観覧していただけるようにしていきたいと考えています。

最後に、今回の展示にあたり、市民の方々からいろいろと寄贈や協力をいただきましたことを深くお礼申し上げます。

(天満 和久)



樫井川河口でマキトラノオガニを採集

2021年10月7日、泉南市を流れる樫井川河口の左岸の突堤護岸において、ケブカガニ科のマキトラノオガニ *Pilumnopeus makianus* の生息を確認したので報告します。茶褐色の甲幅2cmまでの小型種で、甲面、歩脚には長短の軟毛が生え、左右のハサミ脚は大きさが異なります(図1)。



図1. 樫井川で採集したマキトラノオガニ

(2021年10月7日採集)

本種は大阪府レッドリストでは準絶滅危惧種となっており、大阪府の海岸ではあまり記録がなく、貝塚市でも見つかっておりません。近隣で多く生息する場所としては、岸和田市沖に造成された阪南二区人工干潟の石積護岸が挙げられます。

また、本種が生息する場所として、転石下や岩の隙間、カキ殻の間などが知られていますが、今回、樫井川河口では護岸にヤッコカンザシゴカイの棲管が群生して付着している場所の下に隠れて生息していました。同じような場所にはもっと小型のカニ、ヒメベンケイガニも生息しているのが確認されました。

【採集データ】

登録番号 KCMN-C r 775 マキトラノオガニ

(♀: 甲幅 13, 2 mm、♀: 甲幅 10, 5 mm、♀: 甲幅 9. 0mm)

(山田 浩二)

シロトゲエダシャクのメスを発見!

2022年3月5日、岬町多奈川谷川の産土神社の前でフユシャクの雌を見つけました。よくガードレールに虫がいるので見て回っていると、ボルトの上に乗っかるようにしていました(図1)。翅がとても小さく、すぐにフユシャクの雌だとわかりました。腹部の関節間膜から透けて見える緑色の卵が印象的でした。



図1. 発見したシロトゲエダシャク

採集して帰り、調べてみるとシロトゲエダシャク(シャクガ科エダシャク亜科)でした。数日前にフユシャクの雄を採集していて、次は雌を採りたいと思っていたところだったので、びっくりしました。翅が小さく飛べないので、ガードレールを登ってきたのかな、ガードレール下の石垣も登ってきたのかな、どこに昼間はいたのかな、とますますフユシャクに興味が増えました。

(自然遊学館わくわくクラブ くらい きな 鞍井 希風)

 調査速報

貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 23

アオジは普段茂みの中で動き回ることが多いのですが、餌を探しに坂の方に出てきたみたいです。腹が黄色く、目先が黒いのが特徴です。



アオジ

(近木川河口 2022年1月7日)

近木川では、カワセミを見ることができます。川に突き出した枝やススキなどの部分に止まり、エサを狙うことが多いです。

オスメスの判断をするときは、下嘴の色で確認することができます。黒だとオス、赤だとメスと見分けることができます。腹は、オレンジで、背中から尾まで一直線の水色あるのが特徴になります。カワセミは色合いが綺麗で青い宝石などとよばれることもあります。



カワセミ

(近木川河口 2022年1月7日)

毎年、カモの個体数を数えて、記入しているのですが、1月～3月までのカモの個体数を確認すると、去年は約800羽が飛来していて、今年は約700羽が飛来していました。

(鈴子 勝也)



館長コーナー

皆様とともに

自然遊学館の建物は、アンモナイトを模して造られています。入口を入るとすぐに、蕎原で発掘された大きなアンモナイトの化石を見ることができます。この化石は図鑑にもアンモナイトの代表種の一つとして収録されています。また、ある出版社の小学校6年生理科の教科書には自然遊学館の建物とともに掲載されています。(写真1及び2)

今から40年近く前、理科教員の地学研修として、初めて蕎原を訪れました。当時は関西空港開港に向けた阪和自動車道の工事で、岸和田市から泉南市にかけて山を削り、本線道路やトンネル、また周辺道路の整備も行っていました。そのため、良質な露頭が多くみられ、地層や化石研究の場になっていました。

研修会では断層、不整合や層理面などをひと通りの観察をした後、「新聞で見たような大きなアンモナイトの化石が見つかったりして」と、随分能天気と考えながら化石探しをしました。もちろんそのようなものが採れるはずもなく、もう一度来てみたいなど思いつつ研修を終えたことを、しっかりと覚えています。

 **皆様からの情報コーナー**

寄贈標本

<菌類>

- ◆食野俊男さんより
ササクレヒトヨタケ 1点
貝塚市脇浜 2022年3月30日採集

<鳥類>

- ◆松谷勝彦さんより
ヤマシギ 死体1点
堺市桃山台 2022年1月18日採集
- ◆田中広樹さんより
ホシハジロ 死体1点
貝塚市二色の浜 2022年2月6日採集

<魚類>

- ◆丸山幸代さんより
ヒフキョウジ 打ち上げ1点
貝塚市二色の浜 2022年1月15日採集
- ◆河野通浩さんより
ワカサギ 生体8点
滋賀県琵琶湖 2022年1月15日採集
- ◆渡邊淳一さんより
カエルアンコウ 打ち上げ1点
貝塚市二色の浜 2022年2月6日採集



写真1



写真2

あれから40年近くが経ち、本年度から貝塚でお世話になっているのも、何かの巡り合わせかもしれません。天然記念物の和泉葛城山ブナ林、せんごくの杜、津田川やアユの戻った近木川、そして二色の浜、他にもそれぞれの地で地元の皆様を中心に自然の保全に力を尽くしてこられました。そんな豊かな自然が残る町に住む子どもたちが、自然に興味をもち、触れ、学ぶことに、少しでも役に立てるようになりたいと思っています。

(秋山 芳樹)



カエルアンコウ

※ 自然遊学館の記録では貝塚市初記録です。

<軟体動物>

◆高橋節子さんより

クレハガイ 殻2点

チゴトリガイ 片殻1点

シラトリモドキ 軟体部の入った死殻1点

貝塚市二色の浜 2021年12月25日採集

ヤコウガイ 殻1点(名加啓子さんより譲渡)

※大阪市で1930~1933年に御堂筋線工事の際に河川下より発掘されたもの。

◆丸山幸代さんより

ヒメアワビ 殻1点

貝塚市二色の浜 2022年1月10日採集

ツタノハ 殻1点

貝塚市二色の浜 2022年3月5日採集

<節足動物>

◆丸山幸代さんより

カネココブシ 打ち上げ1点

貝塚市二色の浜 2022年1月15日採集

◆渡邊淳一さんより

タイワンガザミ 生体1点

貝塚市二色の浜 2022年2月6日採集

<昆虫>

◆丸山幸代さんより

ユスリカ的一种(幼虫) 液浸標本数点

貝塚市二色の浜 2022年1月28日採集

◆鞍井希風さんより

シロフフユエダシヤク♂ 標本1点

貝塚市自然生態園 2022年2月27日採集

シロトゲエダシヤク♀ 標本1点

泉南郡岬町多奈川谷川 2022年3月5日採集

◆溝尻芳子さんより

ハラビロカマキリの卵囊 1点

貝塚市北町 2022年3月11日採集

<岩石>

◆渡邊淳一さんより

軽石 5点

鹿児島県奄美市奄美大島土浜海岸 2021年11月16日採集

※小笠原諸島「福德岡ノ場」の2021年8月13日の噴火により大量の軽石が浮遊して土浜海岸に漂着したもの。

寄贈写真

<昆虫>

◆秋武仁志さんより

オグマサナエ幼虫他 5点

貝塚市たわわ小池 2022年1月2日撮影

マルタンヤンマ幼虫 3点

貝塚市せんごくの杜 2022年1月30日撮影

マルタンヤンマ幼虫 1点

貝塚市せんごくの杜 2022年3月13日撮影



スタッフ日誌

1月3日、新しい年を迎えて、展示している生きものたちへのエサやりと新年を迎えてのミニ企画展「虎展」の準備を進めました。(天)

2月27日、市商工観光課の主催行事として、二色の浜周辺のまち歩きツアーが行われました。自然遊学館にも訪れた参加者の皆様は「大阪湾の生物や自然について学ぼう!」という今回のテーマを中心に見聞を行いました。(山)

2月28日、二色の浜で漂着物を拾い集めるビーチコーミングを津田小学校6年生の皆様と一緒に行いました。アサリなど様々な貝殻や、魚の骨などを次々に見つけては歓声が上がっていました。また目を皿にして、とても小さなマメウニ類とともに、大きさ・形がそっくり

りなレジンペレットというマイクロプラスチックもたくさん見つけました。(山・天)

3月5日、「自然遊学館の2021年の出来事展」が始まりました。今年もいろいろありましたが、来年はもっと飛躍的に皆様と一緒にいろいろな体験ができる行事などができればと思います。(澤)

自然遊学館だより 2022 春号 (No.102)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

ホームページ

<https://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

フェイスブック

<https://www.facebook.com/sizenyugakukan>

発行日 2022.5.30

この小冊子は庁内印刷で作成しています。